



Title	セリーヌ的反ユダヤ主義 : その特殊性をめぐって
Author(s)	竹田, 悠
Citation	仏語仏文学, 32: 59-74
Issue Date	2006-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/12667
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

セリーヌ的反ユダヤ主義

—その特殊性をめぐって

竹 田 悠

ルイ＝フェルディナン・セリーヌは1930年代から40年代にかけて3冊のユダヤ人に対する攻撃的政治文書、いわゆるパンフレット3部作を刊行した。1936年の『皆殺しのための戯言』（原題 *Bagatelle pour un massacre*）、1938年の『死体派』（原題 *L'Ecole des cadavres*）、そして1941年の『苦境』（原題 *Les beaux draps*）がそれにあたる。1932年の処女作『夜の果てへの旅』で華々しく文壇に登場し、左翼、右翼の両陣営からも、トロツキーやサルトルをはじめとする当時の知識人たちからも絶賛され、この作品はセリーヌの代表作として、現在ではもはや古典の地位を獲得するに至っている。続く2作目の小説『なしくずしの死』も大きな反響を呼び、小説家として着実にキャリアを築いていくかのように見えたにもかかわらず、セリーヌはこれらのパンフレット3部作を書いたことによって反ユダヤ主義者という忌まわしい烙印をおされることになった。セリーヌが現在でも「危険な作家」とみなされているのは、フィリップ・ソレルスの言葉を借りればこれら「すべての時代を通して、最も恐るべき反ユダヤ主義の書物」¹⁾に負うところが大きいわけである。

しかし、『夜の果てへの旅』や『なしくずしの死』と比較すると、パンフレット3部作はほとんど読まれておらず、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の歴史的枠組みの中において、セリーヌの反ユダヤ主義がどういったものであるかについては、これまで小説について書かれてきた多くの論文と比較すると、十分に議論されているとは言いがたい印象を免れない。もちろん反ユダヤ主義に関する話題がいまだにヨーロッパでは、ある種のタ

ブーを伴うこと、あるいは非常に慎重な態度を要する話題であることや、セリーヌのパンフレットがフランスでは出版以来発禁状態におかれ続け、現在でも入手が困難であることを考慮すれば、あまり広く読まれないのもある程度仕方のないことなのであろう。ただこの点に関しては、ここ日本においてはこういった障壁は少なくともヨーロッパと比較すると明らかに少なく、パンフレット3部作は国書刊行会から出版された「セリーヌ全集」に3作品とも収録され、いずれも翻訳で読むことができるが、それでもやはり研究の焦点は多く小説の方へと向かっているのが現状であるように思われる。そこで本論では反ユダヤ主義が今なお非常にデリケートかつアクチュアルな問題であることを十分に留意したうえで、セリーヌのそれがどういった性格のものであるのか、またどういった位置づけをすればよいのかということについて若干の考察を試みたい。

血統に関する議論の欠如

最初にパンフレットを一読して気づくことは、反ユダヤ的色彩の非常に濃いものであるにもかかわらず、パンフレットの中にははっきりとしたユダヤ民族の定義がほとんど書かれていない、あるいはあったとしても非常に具体性の伴わないものであるということである。以下はパンフレットの『死体派』からの引用である。

Les Juifs, racialement, sont des monstres, des hybrides loupés, tirailés qui doivent disparaître. [...] Il [le juif] est le damné de sa propre substance, des tiraillements de sa viande d'hybride.²⁾

セリーヌはユダヤ人のことを「化け物」呼ばわりしているが、その論拠となるような言説はパンフレット中にはもちろん、それ以外の著作に目を通して見出すことは出来ない。ほぼ時代を同じくしてナチスドイツの血統によるユダヤ人を定義の試みと比較すると、セリーヌによる定義は極めて曖昧かついい加減であると言わざるをえない。これをセリーヌ一流の

ユーモア、あるいは諧謔として片付けてしまえばそれまでだが、実は「ユダヤ人」を明確に定義することは、これ自体極めて困難なことである。まずこのことについて若干の注意を促しておきたい。

例えば、サルトルは 1954 年『ユダヤ人』の中で「ユダヤ人とは、他の人々が、ユダヤ人と考えている人間である。これが単純な真理であり、ここから出発すべきなのである。」³⁾ という具合にユダヤ人を定義した。人種を特定しなければならない時、それを規定するものの一つとして、我々はしばしば「国籍」という概念を持ち出すことができる。もちろん「国籍」という語の持つ定義が非常に複雑で、多くの問題を抱えているのも事実だが、日本人＝日本国籍の所有者といった具合に、ある程度まで目安とすることは可能であろう。

しかしながら、イスラエル建国まで祖国を持つことのなかった「ユダヤ人」には、我々の持つ「国籍」の概念はあてはまらない。あてはめることができないと言ったほうが正確であろうか。彼らには長い間祖国がなかったので、イスラエルという祖国が出来るまで、国籍という概念が通用しないのである。つまり、イスラエル建国以前においては、「ユダヤ人」を国籍によって定義することはそもそも不可能ということになる。ところで問題が複雑なのは、イスラエル建国以降においても、「イスラエル人」ではなくても自分のことを「ユダヤ人」だと思っている人はたくさんいるということで、それではその場合「ユダヤ人」とは一体何を指しているのであろうか。「ユダヤ人」という言葉が、ある程度明確な意味を持ちうるおそらく唯一の指標は、「ユダヤ教徒」ということであつたと言えよう。実際、「ユダヤ人」とは、少なくとも 19 世紀前半までは、基本的にはユダヤ教徒と同じ意味であつたといつてよい。

ところが、19 世紀に入ると、多くの「ユダヤ人＝ユダヤ教徒」がキリスト教に改宗するなどして、自分のいる国に同化してしまう。そうすると「同化ユダヤ人」は「ユダヤ人」ではないのかという問題が登場してくることになる。

この問いには、はっきりした答えを出すことができないが、ユダヤ教を

離れた人々が、必ずしもすべて、自分のことを「ユダヤ人」でなくなったと考えたわけではないし、また他者から一切「ユダヤ人」として扱われなくなったというわけでも当然ない。

「同化ユダヤ人」は必ずしも同化した国の「国民」として、法的、政治的、社会的なあらゆる意味で平等に扱われたわけでもないのである。彼らは、「同化」後も、何らかの形で「ユダヤ人」として扱われることを余儀なくされたし、また「同化ユダヤ人」たち自身も、程度の差はあれ、多くの場合、「ユダヤ人」としてのアイデンティティを失ってしまったわけではなかった。

19世紀以降の「ユダヤ人」と反ユダヤ主義をめぐる問題の難しさは、まさにこの「ユダヤ人」たらしめているものの曖昧さに深くかかわっており、サルトルの先ほどの定義によると、言語も人種も宗教もユダヤ人であるというこの指標にはなり得ないのである。ここで先ほどのセリーヌの言説をもう一度見てみることにしよう。セリーヌの「ユダヤ人は化け物で雑種」という極めて曖昧かついい加減な定義はサルトルの「ユダヤ人とは、他の人々が、ユダヤ人だと考えている人間である」というこの定義をまた違った方向から裏付けるものと言えはしないか。つまり、セリーヌのパンフレットの中でユダヤ人の血統に関する議論がこのように曖昧な形にならざるをえなかったのも、サルトルと同様に、指標とすべきものをなにも見いだすことができなかったからだという風に言えるのではないか。

そうであるにもかかわらず、セリーヌは「ユダヤ人種」の存在を頑なに主張する。

Ceux qui disent: 《Il n'y a pas de race juive》, ou bien: 《Les Juifs représentent une ethnie, pas une race !》 JOUENT SUR LES MOTS. Certes il existe avant tout une ethnie juive; c'est l'ethnie juive qui joue un rôle dans l'histoire. ⁴⁾

パンフレットを読む限り、おそらく「ユダヤ人とは何者か」という問い

にセリーヌは明確な答えを持ってはいない。そうであるにもかかわらず、「ユダヤ人種」の存在を信じこみ、攻撃しているのだ。パンフレットが刊行された当時、アンドレ・ジッドをはじめ多くの作家、知識人たちが、セリーヌが本気でパンフレットを書いたのかどうか疑問に感じたというのは、正しいと言える。

いうまでもなくナチズムは19世紀後半に出現した手法を引継ぎ、「ユダヤ人」を出生と生物学的な血統によって、つまりは人種として定義しようとしたが、その「血統」なるものは、実際にはせいぜい何世代か前の先祖に「ユダヤ教徒」の人間がいたということ以上のことを意味するものではなかったのだ。事実ユダヤ人の定義を定めたドイツのニュルンベルク法においても、「ユダヤ人」とは、祖父母4人のうち3人が「ユダヤ教徒」であったものを「完全なユダヤ人」と規定するものであった。このことは、まさに「血」の原理なるものは純粋に血統の原理に基づいているわけではなく、そのようなことはそもそも不可能だということを、雄弁に物語っていることができよう。19世紀末からナチズムにいたる時代の反ユダヤ主義の「ユダヤ人」概念は、基本的に「ユダヤ人」を生物学的な人種として捉え、それにさまざまな特性をあてはめてきたということは事実だが、多くの場合「血」とは、客観的な事実ではなく、イメージの問題なのであり、セリーヌにとってもそれは同様なのである。

ではセリーヌはユダヤ人の何を攻撃したのであろうか。パンフレットの中から具体的に見ていくことにしよう。

パンフレットのユダヤ人

19世紀以降、反ユダヤ主義者たちはユダヤ人に対して攻撃してきたが、それはほとんどいつも「ユダヤ人たちは莫大な財力で、自分たちのいる国に影響を及ぼし、支配するにいたる。」という常套句によるものであり、ドリュモンをはじめとする多くの反ユダヤ主義たちの言説は、確認不可能な流言蜚語を用いて、なんとかこれを証明しようとするものが多くあった。

この点に関してはセリーヌも同様で、やはりユダヤ人の支配を考えてい

た。

La France est une colonie de pouvoir juif international, toute velléité de chouannerie est condamné d'avance à la faillite honteuse. La France matérialisée rationalisée... parfaitement subjuguée par la bassesse juive, alcoolisée jusqu'aux moelles, mesquinement resquilleuse, vénale, absolument, stérilisée de tout lyrisme, malthusienne par surcroît, est vouée à la destruction, au massacre enthousiaste par les Juifs.⁵⁾

ここでもやはりセリーヌ特有の言葉でこれまでの反ユダヤ主義者たちの常套句がくりかえされる。ユダヤ人のよる支配はほとんど確実に到来するというのだ。

このようにしてユダヤ人は様々な分野で多岐に渡って攻撃されているが、パンフレットにおいてとりわけ何度も繰り返され、強調されているのがユダヤ人に戦争の責任があるという言説である。

Allons tout de suite au fond des choses. Les Démocraties veulent la guerre. Les Démocraties auront la guerre finalement. Démocraties=Masses aryennes domestiquées, rançonnées, vinaigrées, divisées, muflisées, ahuries par les Juifs au saccage, hypnotisées, dépersonnalisées, dressées, aux haines absurdes, fratricides. Perclues, affolées, par la propagande infernale youtre: Radio, Ciné, Presse, Loges, fripouillages électoraux, marxistes, socialistes, larocquistes, vingt-cinquième-heuristes, tout ce qu'il vous plaira, mais en définitive: conjuration juive, satrapie juive, tyrannie gangrenante juive.⁶⁾

Le même entêtement à résister à la guerre que déploient les Juif à nous y précipiter. [...] Nous irons à la guerre des Juifs. Nous ne sommes plus bons qu'à mourir.⁷⁾

C'est tout pareil pour les nations quand elles deviennent trop pourries. C'est les Juifs qui les font sauter, sursauter, rebondir encore. Jusqu'au délabrement suprême. Tout s'arrache alors, tout se décroche, on balaye. C'est terminé.⁸⁾

こういったユダヤ人＝戦争の起爆要因の構図がパンフレットのいたるところに見出される。セリーヌによると戦争の背後には常にユダヤ人たち、あるいはユダヤ資本の存在があるというのだ。これもまた反ユダヤ主義者たちの常套句のひとつであり、これだけならばそう目新しいところはないのだが、セリーヌはパンフレットの中で過剰かつ執拗にこの点を強調する。セリーヌにとって戦争がとりわけ耐え難いものであったことは間違いないが、この点に関してはセリーヌの戦争体験が大きく関与していると思われる。

戦争体験

セリーヌは1912年に志願して、1914年に20歳で機甲部隊兵となり、第1次世界大戦へ出兵、ベルギーで頭部と右上腕に重傷を負い、負傷兵として帰還してきたという経歴を持つ。負傷の度合いは極めて重く、あやうく手術で右腕が切断されそうになったが、セリーヌはそれを断固拒否、弾丸の摘出手術を、知らないうちに腕を切断されるかもしれないという恐怖心から、本人たっでの希望で麻酔を使用することなしに受け、その結果想像を絶する苦しみを受け、頭部の傷も相当なものであったという。

おそらく、是が非でも戦争を拒もうとするセリーヌの姿勢の要因のひとつをこの点に求めることができるのではないか。ここにいたって、反ユダヤ主義の書物であるパンフレットにもう一つの新たな読み方生じてくる。パンフレットの中で唱えられた反ユダヤ主義がセリーヌにとってなによりも平和のための行為であったこと、新たな殺戮を阻止しようとする意思であり、自分の仲間たちの危機を救おうとする元兵士の叫びであったという

ことである。ナチスドイツがドイツのみならずヨーロッパに覇権を確立しつつあった 1939 年、もはや平和を求めることが完全に時代錯誤となったような時でもセリーヌはそれを追い求めた。「反ユダヤ主義」と「反戦主義」あるいは「平和主義」の共存についてはアンリ・ゴダールが「セリーヌのパンフレットでは両者が混同することなく混ざり合っている」⁹⁾と指摘する通りである。事実、「平和主義」はセリーヌの作品を貫く大きなモチーフのひとつであり、ここから小説家としてのキャリアを始めたと言っても過言ではなく、1924 年に提出された医学論文、『フィリップ・イグナーツ・ゼンメルヴァイスの生涯と業績』において、セリーヌ特有の非常に辛辣な表現で、戦争への嫌悪をすでに見て取ることができるのである。

Bousculés, meurtis, soutenus par des phrases, guidés par la faim, possédés par la mort, ils envahirent, pillèrent, conquièrent chaque jour un royaume inutile que d'autres perdaient demain. On les vit passer sous toutes les arches du monde, tour à tour dans une ronde ridicule et flamboyante, boyante, déferlant ici, battus là, trompés partout, renvoyés sans cesse de l'Inconnu au Néant, aussi contents de mourir que de vivre.¹⁰⁾

この文章が書かれた後も、セリーヌは自分の存在を脅かす戦争に対して辛辣な言葉を浴びせ続けるようになるのである。

反戦主義的側面

セリーヌが反ユダヤ主義者だとみなされる一番大きな原因を作ったこれらパンフレットは、やはり非常に厄介な作品である。これは歴史的な検証に基づいた歴史書などでは全くないし、ましてや文学的傑作でもない。ジャーナリストであり反ユダヤの機関紙の主催者であったエドゥアール・ドリュモン以来のあらゆる反ユダヤ主義の書物から影響を受けたこれら一連の作品は非常に多くの偽証に満ちている。しかし先に挙げた『フィリップ・イグナーツ・ゼンメルヴァイスの生涯と業績』の引用と『死体派』の

中の以下のような言説の間には確実に同じ種類のメッセージを読み取ることが可能であろう。

L'issue de la prochaine on s'en fout, puisque de toutes les façons, nous serons portés disparus, repassés en cours de route. Ça peut pas nous intéresser, ni la victoire, ni la défaite, puisque de toutes les manières, nous ne verrons ni l'une ni l'autre, nous serons décédés bien avant, emboutis, broyés, émiettés dans les fracasseries enthousiastes, les croisaderies libératrices fantastiquement fulminantes. On retrouvera même pas nos cendres tellement on sera partis violents. Nous disparaîtrons corps et âme de ce territoire, bien avant la dernière bataille la Patrie elle existera plus, fumée! ça sera des souvenirs de boudins, des fictions éponnées au sang. A la fin de la prochaine guerre, on aura vu tellement de choses, il s'en sera passé des si drôles, qu'on se souviendra même plus de ceux qui l'auront commencée, ni pourquoi ils l'ont commencée... ¹¹⁾

また、この言説は反ユダヤ主義的言説で固められたパンフレットの中にあって、思わず口をついて出てしまった本音の一言ととらえることができるかもしれない。さらに猜疑を深めるなら、思わず口をすべらしたふりをして、後のための自己弁護のためにあえて書かれた一文ととることも可能であろう。

いずれにせよ、セリーヌの著作の中に、こういった言説が登場するのは実は初めてではないのは先に見たとおりであるが、こういった発言は処女作『夜の果ての旅』にも登場するのである。主人公、フェルディナン・バルダミュとその恋人、ローラの対話の場面に次のようなものがある。バルダミュはローラに言う。

—Lora, je refuse la guerre et tout ce qu'il y a dedans... Je ne la déplore pas moi... Je ne me résigne pas moi... Je ne pleurniche pas dessus moi... Je

ne la refuse tout net, avec tous les hommes qu'elle contient, je ne veux rien avoir à faire avec eux, avec elle. Seraient-ils neuf cent quatre-vingt-quinze millions et moi tout seul, c'est eux qui ont tort, Lora, et c'est moi qui ai raison, parce que je suis le seul à savoir ce que je veux : je ne veux plus mourir.¹²⁾

戦争を否定するバルダミュに対してローラは「戦争を否定するのは臆病者ぐらいよ」と反論するが、バルダミュはさらに続ける。

—Vous souvenez-vous d'un seul nom par exemple, Lora, d'un des soldats tu-és pendant la guerre de Cent Ans?... Avez-vous jamais cherché à en connaître un seul de ces noms?... Non, n'est-ce pas?... Vous n'avez jamais cherché ? [...] Dans dix mille ans d'ici, je vous fais le pari que cette guerre, si remarquable qu'elle nous paraisse à présent, sera complètement oubliée... À peine si une douzaine d'érudits se chamailleront encore par-ci, par-là, à son occasion et à propos des dates des principales hécatombes dont elle fut illustrée... C'est tout ce que les hommes ont réussi jusqu'ici à trouver de mémorable au sujet les uns des autres à quelques siècles, à quelques années et même à quelques heures de distance... Je ne crois pas à l'avenir, Lora...¹³⁾

セリーヌは作品の中でしばしば戦争への嫌悪感を露骨に表すが、かつて反ユダヤ主義者と標榜された人物の中で、かたちはどのようなものであれ、かくも執拗に戦争への嫌悪を唱えた人物はおそらく稀であろう。単純化を恐れず言うなら、かくしてセリーヌにおいて熱狂的な「反ユダヤ主義」と是が非でも戦争を避けようとする「平和主義」が結びつくことになる。

この点については Jacqueline Morand の *Les idées politiques de Louis-Ferdinand CÉLINE* に興味深い指摘があるのでここにその一部を紹介したい。

Il y a deux aspects au pacifisme de L.-F. Céline. Le premier correspond à un refus de la guerre en général, à une révolte individuelle contre toutes les manifestations de ce mal. Le deuxième est le réquisitoire d'un citoyen qui, placé dans une situation donnée (menace d'une seconde guerre mondiale), et conscient de sa responsabilité d'homme public et d'écrivain, s'engage pour tenter de mettre en garde ses concitoyens. Ceci correspond en quelque sorte à la distinction que fait A. Toynbee entre le pacifisme, action directe en tant que personne privée, refus personnel de se prêter en aucune façon à la guerre, et le pacifisme action indirecte en tant que citoyen.¹⁴⁾

ここで筆者はトインビーの「個人としての直接的行動による平和主義」と「市民としての間接的行動による平和主義」の区別を引き合いにだしながら、セリーヌの「平和主義」の二面性を強調する。つまり第1に「戦争の拒絶, 個人的な反抗」があり, 第2に「同じ町に住む市民に警告を促す一市民の告発」である。これをセリーヌに当てはめると, パンフレットが前者, 小説作品は後者ということになる。

セリーヌ的反ユダヤ主義

もっとも「ユダヤ人=戦争の原因」ということだけであれば, 事態はそれほど複雑ではないのだが, 厄介なのは「ユダヤ」という言葉が, 「戦争の原因」という範疇に納まりきらないということである。例えば, 次のような言説などがそうであろう。

Déjà par un effet du hasard, nos journalistes, speakers, auteurs, cinéastes, ne trouvent plus rien d'admirable à travers le présent, le passé, l'Histoire et l'Avenir, dans les arts, gazettes politiques, finances, sciences, que de Juif... les efforts juifs, les succès juifs, les projets de juif ou

d'enjuivés (Voir Montaigne, Racine, Stendhal, Zola, Cézanne, Maupassant, Modi, Prout-Proust, etc.).¹⁵⁾

モンテーニュやラシーヌやゾラなどが「ユダヤ的」と評されているが、いわゆる名文家と呼ばれる人たちがこれまでインタビューなどで、ことあるごとに攻撃されてきたことを思い起こせば、これらの固有名詞がセリーヌ自身の嗜好といった極めて個人的な要素に大きくかかわっていることは明白である。このユダヤ的と評された人物の中には第3共和制を通じてのテロリズムと反ユダヤ主義の指導者であり、極めて反ユダヤ主義的色彩の濃かった「アクション・フランセーズ」紙の中心人物、シャルル・モーラスも含まれている。

結局のところ、「ユダヤ」あるいは「ユダヤ的」といった言葉はセリーヌにとって、「平和主義」や「個人的嗜好」など、さまざま要素の入り混じったものであるということができよう。

ヨーロッパにおいて「反ユダヤ主義」の歴史は古いものでだが、このセリーヌ的反ユダヤ主義を19世紀末から20世紀へといたる「反ユダヤ主義」の流れにおくとどうなるか。

反ユダヤ主義が一つのピークを迎えた19世紀後半、エドゥアール・ドリュモンは「フランスをフランス人の手に」と自らが主催する反ユダヤの機関紙で唱えたわけだが、そこには同化政策を支える共和国の原理そのものへの懐疑があった。こういった異邦人を排除しようとする動きは、必然的にファシズムへと向かうことになる。

しかも、反ユダヤ主義は思想だけではなく、運動の面でもファシズム容認の動きの仲立ちをしていることに注目したい。反ユダヤ主義者は金融スキャンダルの背後のユダヤ人を攻撃し、共和体制と自由主義を否定してでもユダヤ人を社会から除こうとしたが、それが大衆から支持されたので、人種差別的極右という政治的主張をもつ団体が現れた。20世紀前半のジャック・ドリオのフランス人民党にせよ、マルセル・デアのネオソシアリズムにせよ、これらの大衆運動はいずれも金融資本と議会の癒着を目的

当たりし、ユダヤとフリーメイソンを憎んだ。また出征軍人を母体とするド・ラ・ロック大佐の「火の十字架団」を始め、左翼の改革派も反ユダヤ主義を通して、極右へと流れていった。

しかし、果たしてセリーヌの唱える「反ユダヤ主義」はどうであろうか。おそらくほとんど果たしていない。セリーヌはパリに居を構える一介の医師であり、小説家でしかなかった。したがって、19世紀末から20世紀へといたる反ユダヤ主義言説の担い手たち、例えばゴビノー、ドリュモン、ルナン、モーラス、バレスといった人物たちと比較すると、セリーヌの特色が浮かび上がる。

この流れのなかにセリーヌの居場所を見つけることは非常に困難である。セリーヌは彼らと異なって、なんら政治的な活動に携わっておらず、この点からも、セリーヌの「反ユダヤ主義」はそれまでの流れ大きく異なっていると考えるべきであり、思潮の形成という観点から見た場合、セリーヌの反ユダヤ主義はこの系譜からは切り離して考えられるべきである。フランソワ・ジボーはセリーヌの人柄について以下のように語った。

C'est la vie d'un solitaire, c'est un homme qui a toujours agi seul, qui n'a jamais appartenu à aucune groupe, aucun parti. Enfant unique, blessé au cours de la guerre de 14 lors d'une action solitaire, il a mené une vie solitaire mais engagée dans son temps.¹⁶⁾

このジボーの証言はセリーヌの反ユダヤ主義にほとんどそのまま当てはめることが可能である。

しかし、思想的には結局のところ紋切り型の域をでなかったセリーヌ的反ユダヤ主義はそれまでに存在しなかったイデオロギー的狂信とでも言うべき新しい要素をフランスにおける「反ユダヤ」の歴史の中に持ち込んだ。それはとりわけその語りに負うところが大きい。また別の紙面を要するため、この場では扱わず、今後の研究課題としたい。

結論にかえて

ひとまずここで、結論をだすことにしよう。反ユダヤ主義といっても非常に様々な形態があり、とりわけドレフュス事件以降、20世紀におけるそれは非常に複雑な様相を呈しているが、その中においてセリーヌは、明確な人種としてのユダヤ人の概念を明示することなく、とりわけ戦争とユダヤ人との結びつきを強調した、つまりユダヤ人たちを戦争のスケープゴートとして描いたということが出来よう。しかし、だからといってナチスドイツとの反ユダヤ的な人種差別思想の共有を許してよいというわけでは断じてない。セリーヌが差別的な思想を持つにいたったことは、どのような理由であれ、遺憾であることにはかわりはない。我々がセリーヌを読むとき、「反戦主義」と「反ユダヤ主義」という二つの項目の間で宙吊りにされ、その間をさまようことになるのである。

またそれと同時に、「ラシーヌ、スタンダールが嫌い」といった個人的な趣向もあからさまにはいりこんでおり、どこまでが本気でどこまでが冗談か明確な境界の引き難い非常に複雑で混沌とした様相を呈しているのも事実である。我々はセリーヌが「ユダヤ」という言葉を用いる際、この言葉が通常我々が考えるものとかかなりかけ離れたものであり、多様な意味を持つことに注意をはらわなくてはならない。Jacqueline Morand は言う。

Au terme de cette étude sur l'antisémitisme de L.-F. Céline plusieurs conclusions peuvent être tirées. [...] Il est impossible de l'accepter autrement que comme un simple élément d'appréciation.¹⁷⁾

たしかにそうであろう。ならば我々にできることは、セリーヌの反ユダヤ主義をひとつの枠組みにおしやらず、その多様性に注意を払い続けることである。この点についても今後の課題としたい。

(博士課程後期課程)

注

- 1) Sollers, Philippe, 《Purgatoire de Céline》, *L'INFINI*, 81, 2002, p.8.
- 2) Céline, *L'Ecole des cadavres* (以下, EC), Edition Denoël, 1938, p.108.
- 3) Sartre, Jean-Paul, *Réflexions sur la question juive*, Gallimard, Coll. Idées, 1954, p.83.
- 4) EC, p.227.
- 5) Céline, *Bagatelle pour un massacre* (以下, BM), Edition Denoël, 1937, p.85.
- 6) EC, p.25.
- 7) EC, p.82.
- 8) EC, p.118.
- 9) Godard, Henri, *Céline scandale*, Gallimard, 1994, p.98.
- 10) Céline, *La vie de l'œuvre de Philippe Ignace Semmelweis*, in *Œuvre de Céline*, édition présentée par Frederic Vitoux ; illustrations originales de Raymond Moretti ; 4. -- Club de l'honnête homme, 1981, p.26.
- 11) EC, p.79.
- 12) Céline, *Voyage au bout de la nuit* (以下, VN), in *Céline Romans I*, édition présentée, établie et annotée par Henri Godard, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1981, p.66.
- 13) VN, p.66.
- 14) Morand, Jacqueline, *Les idées politiques de Louis-Ferdinand CÉLINE*, Librairie Générale de Droit et de Jurisprudence, 1972, p.22.
- 15) Céline, *Bagatelle pour un massacre*, Edition Denoël, 1937, p.125.
- 16) Gibault, François, 《Céline, cavalier seul》, *Louis-Ferdinand CÉLINE Magazine* littéraire hors-série, 2002, p.32.
- 17) *Ibid.*, p.79.

参考文献

- Alméras, Philippe, *Je suis le bouc. Céline et l'antisémitisme*, Edition Denoël, 2000.
- Alméras, Philippe, *Céline. entre haines et passion*, Robert Laffont, 1994.
- Arendt, Hannah, *Les origines du totalitarisme. Sur l'antisémitisme*, Seuil, 1984.
- Parinaud, André, *Céline la maîtrise de l'outrance*, Le Bulletin célinien, 2001.
- Prazan, Michaël, 《L'antisémitisme de Céline : Le style, c'est l'homme》, *Les temps modernes*, No623, 2003.
- Toynbee, Arnold, *Guerre et civilisation*, Gallimard, 1953.

Vitoux, Frédéric, *La vie de Céline*, Grasset & Fasquelle, 1988.

有田英也, 『ふたつのナショナリズム』, みすず書房, 2000年

福田和也, 『奇妙な廃墟』, 国書刊行会, 1988年